





名古屋芸術大学 芸術学部 芸術学科 芸術教養領域 リバラルアーツコース

2022(R4)年度 特別選抜 エキスパート入学試験 レクチャー メモ用紙

受験番号	氏名
------	----

※この用紙は試験終了後、回収します。

レクチャーについて、あなた自身の判断で自由にメモしてください。裏面を使用しても構いません。メモ内容は採点しません。

\* 本試験では、このレクチャーおよび、レクチャー終了後に配布する課題文をふまえたうえで、レポート執筆します。その後、口頭プレゼンテーション、ディスカッションをします。すべての試験中、スマートフォン等の通信機器は鞆に入れたままにしてください。

名古屋芸術大学 芸術学部 芸術学科 芸術教養領域 リベラルアーツコース  
2022(R4)年度 特別選抜 エキスパート入学試験 課題文

受験番号	氏名
------	----

※この用紙は試験終了後、回収します。線を引くなどのメモは自由です。メモ内容は採点しません。

下は、会社に勤務した後、廃墟や廃線、古い街並みなどを撮影する写真家となった丸田祥三氏(1964年生まれ)が語った話です。本課題文用紙にも自由にメモを記しても構いません。

\*本試験では、前のレクチャーおよび、この文章をふまえたうえで、レポート執筆します。その後、口頭プレゼンテーション、ディスカッションします。すべての試験中、スマートフォン等の通信機器は鞆に入れたままにしてください。

初めてカメラを持ってシャッターを切ったのは五歳の頃です。<sup>ひんぱん</sup>頻繁に撮るようになったのは小学校にあがってすぐのことでした。

<前略> 廃屋や使われなくなった線路など、当時は誰も<sup>いちべつ</sup>一瞥もくれないようなものばかりを探だし、懸命にシャッターを切り続けたものでした。

<中略>

「ものを描くということは、失せてしまうものの痛みを、しっかりしたカタチに残し、後世にそれを伝え示すことだ」

俳句などを<sup>たしな</sup>嗜んだ祖父のそんな言葉が心に伝わったからか、物心ついた頃、母と観たポール・デルヴォー(一八九七-一九九四・ベルギー生まれの画家)の絵画に魅かれたか。<後略>

<中略>

プロになった今も、この幼少の頃に撮った写真を時おり仕事に使うことがあります。

ミュージシャン・くるりのCD『街』に載せた街の写真は、中学二年の時に撮ったものですし、雑誌『東京人』(二〇〇二年二月号)の表紙に使った蒸気機関車は、小学五年の時の撮影です。「世界中どこを探したって<sup>あなた</sup>貴方のような写真家はいない」と、仕事関係の皆さん方からよく笑われます。

<中略>

<前略> 写真を撮る上で時おり気の重くなる、一番大変な苦勞がありました。それは、撮影の許可を取る時です。

「どうしてこんなものを撮りたいの？」

不快そうな顔で<sup>きつもん</sup>詰問してくる大人を、説得しなければならなかったのです。当時は戦争が終わって三〇年を経た頃でもありました。

<sup>がれき</sup>瓦礫のなかに立ち尽くしていた人たちが、それでも懸命に前に進み、三〇年がかりで、世界の大国に迫る発展を遂げた。多くの大人が、そう自負していた時期です。そんなタイミングで、日本のもつとも<sup>みじ</sup>惨めだった時代の遺物を子どもが記録したい、というのは、世の大人にとってまったく受け入れがたいものだったでしょう。

<中略>

つまり「(戦後復興や高度経済成長時代のシンボルである)新しいものに魅かれなければ、前向きでは

ない。子どもらしさが感じられない。だから子どもの取り組みとして、認めることはできない」、そんな今では考えられないような理由での拒絶だったのです。<後略>

そんな時、私はきまって自分なりに考えた、懸命な反論を試みたものでした。

「豊かになったばかりの人に、ちょっと前の貧しかった時代の話をしたら、きっと嫌な顔をされるのは当然だと思っています。でも何十年も経って、豊かなことが当然になったら、やっぱり過去をキチンと捉えかえそう、という人が増えてくると思います。私のこういう写真を“よくぞ撮っておいてくれた”と言ってくださる方がかならず現れると思うんです」

<中略>

しかし、世間の無理解というのは凄まじいものでした。私は周囲から、「棄てられるものには価値などない(だからこそ棄てられるのだ)。そんなもの撮るのは高価なフィルムの無駄使いだろう」と、これも何百回言われたか知りません。

<中略>

自分にとって、表現する、ということは、おそらく“無理解と対峙し続ける”ということなのだろう…。中学に上がる頃にはもう、私はそういったことを痛感していました。

私の父はプロの棋士で、地方への巡業もよくありましたので、そこに同行し、現地で別行動をとり、よく撮影に行ったものです。

<中略>

ただ父は、写真を「純粹表現とは認めていない」と私に言ったものでした。理由はこのようなものでした。

「プロの指す将棋に“待った”は無い。やり直しはきかない。絶対後には引けない。そういう緊張が、人間にいい仕事をさせるものだ。何度もシャッターを切り、そのなかから良い一枚を選ぶ、という写真の世界は、どうも純粹な表現とは思えないね」

<中略>

フィルムは最初、カラーでも撮りたかったのですが、父から、「子どもがカラー写真というのは贅沢だ」と反対され、ほとんど白黒で撮っていました。ところがある時、父の知人の作家さんからたいへん興味深いお話を伺って、白黒写真への関心を深めることとなったのでした。その方は、戦時中の病が原因で、色が認識できなくなりました。

「私は色が認識できなくなった今のほうが、真実がよく見える気がしますね。人は色に惑うものなんですよ。街の風景がカラフルになると、それだけで社会全体が華やかに、豊かになったと勘違いしてしまう人って、私の周りにも非常に多いですね。でも色の判らない私には、戦後の街はどんどん寒々しくなっていくようにしか感じられない…」

<中略>

<前略> <丸田氏は> 大学卒業と同時に、ある映画会社に就職し、テレビドラマの企画をする部署に配属されました。一九八〇年代後半のことです。

<中略>

私の入った会社では、監督さんや脚本家など、秀でた才能の持ち主ほど、何年も作品づくりの機会に恵まれず、いわゆる干された状態で、どう考えてもさして優れているとは思えないタレントやライターばかり重用される、というりだったのです。<後略>

<前略> 軽佻浮薄さをよしとする、八〇年代というこの時の時代状況もよくなかったのかもしれない。

が、将棋のように勝敗や優劣が判り難く、評価が人の主観に委ねられる映像表現の世界の難しさを痛感させられたものでした。

<中略>

当人の実力より、大きな事務所の推しでプロの表現者が誕生し、次々消費されて行く。そんなことが日常茶飯事にちじょうさはんじになっていました。

「一九六〇～七〇年代頃までは、こんなことは絶対になかった。ものづくりの現場は、もっと緊張感のある場だった」

「これからはもう本当に、素人っぽい人や、薄く軽いこだわりしか持たない人の方が、売れてしまう時代なのかもしれません」

年配の社員たちもそいいながら溜め息をついていたものです。

憧れの厳しいプロの表現の場は“自分が世に出るほんの少し前に終わり、もう二度と再興されることはないのだ…”と絶望的な気持ちになったものでした。

しかし私は、二〇代の終わりに会社員を辞めて、フリーの写真家になりました。なぜそんな悪状況下の表現の場で、フリーの表現者になったのか。たしかに悩んだ時期もあったのですが、一方で逆さまの勇気が徐々に湧いてきたのかもしれません。

そもそも自分にとっての表現は、「無理解と対峙し続ける」ということですので、こういう悲惨な状況だからこそ(終戦直後に瓦礫のなかから歩みを始めた人々のように)むしろ頑張ってみたい、と思い立ったからなのです。

今は物がうち棄てられるだけではなく、人間までもが切り捨てられる世の中になってしまいました。もしかしら終戦直後より、痛ましい時代になっているのかもしれません。それ故に撮るもの、捉え、描かれなければならないものは、まだまだたくさんあります。

丸田祥三『無理解と対峙し続ける、ということ』

岩波書店編集部編『表現する仕事がしたい！』岩波ジュニア新書 631、2009、岩波書店 より引用  
(<>内、省略は引用者による)

名古屋芸術大学 芸術学部 芸術学科 芸術教養領域 リベラルアーツコース  
2022(R4)年度 特別選抜 エキスパート入学試験 ディスカッション メモ用紙

受験番号	氏名
------	----

※この用紙は試験終了後、回収します。

ディスカッションのテーマ：芸術や文化と無理解、文化・芸術・芸術家・芸術作品を理解するとは何か

ディスカッション時に、あなた自身の判断で自由にメモしてください。裏面を使用しても構いません。メモ内容は採点しません。

**試験内容**：試験の全体構成および以下の順である。

- ・ レクチャー<sup>(※1)</sup> および文章<sup>(※2)</sup> 読解 (各 20 分間)
- ・ 以上をふまえた課題に回答する形でのレポート執筆<sup>(※3)</sup> (60 分間)
- ・ 口頭発表 (1 名あたり 2～3 分間)
- ・ ディスカッション (60 分間)

※1：芸術教養領域教員によるレクチャー（口頭およびスライド映写）

※2：丸田祥三『無理解と対峙し続ける，ということ』（岩波書店編集部編『表現する仕事をした  
い！』、岩波ジュニア新書 631、2009、岩波書店）より抜粋引用。

※3：レポート課題は以下（解答用紙には原稿用紙様の罫目が付いている）

- (1) 最初のレクチャーの概要を 100 字程度で記してください。自分の感想は入れないこと。
  - (2) レクチャー後に配布した文章で丸田氏が述べたいと考えられることを 3 つ、それぞれ 100 字程度で記してください。
  - (3) レクチャーと丸田氏の話をつまみ、あなた自身や、あなたが支援したい誰か（例：マンガ家や芸術家などの作家、俳優、運動選手、同級生、家族等）が直面する「無理解」とは何かを記した上で、それと対峙するために必要なことを考え、500 字程度で記してください。
-

## 出題意図

特に優れた力をもつ学費免除候補者を対象としたエキスパート入試であることをふまえたうえで、下記項目の力をはかる。芸術教養領域における「特に優れた力を持つ人」とは、当該領域の AP に合致し、CP に示した授業等で優秀な成績を修める可能性が高く、DP で示したようなジェネラリストを目指し、授業における学修のみならず、課外においても活躍し、自己研鑽するとともに、他者と協働できる人である。

注：AP、CP、DP の 3 つのポリシーは末尾に掲載

- ・複雑な物事を把握し、それを言葉として表現できる力：レクチャーと文章の内容を把握し、日本語で的確にまとめることができるか（レポート、口頭プレゼンテーション）。
- ・自分の頭で考え、独創的な発想をする力：レクチャーと文章の内容をふまえたうえで、自ら課題解決に繋がることを考えられるか（レポート）。
- ・人と人をつなぐ力：他の人の言葉を把握したうえで、自らの考えを、言語的な論理性および非言語的な力で、的確に他者へ伝えることができるか。また、他者の質問に適切に応じ、建設的なディスカッションができるか（ディスカッション）。

参考) 芸術教養領域のアドミッションポリシー (AP)、カリキュラムポリシー (CP)、ディプロマポリシー (DP) は以下。( ) 内に示したものが芸術学部のポリシーである。

AP：音楽、美術とデザイン、現代の多様な文化と社会に関心があり、自らの発想と知恵、感覚をいかし、地域と社会がかかえる課題を、協働して解決していく意欲のある人を求める。  
(芸術に創造的な価値を見だし、それを通じて社会に貢献することを志す、幅広い視野と意欲を持った人を求める。)

CP：視聴覚メディアと言語、情報のリテラシーを修得し、少人数ゼミとプロジェクト授業を通して、世界と現代社会の問題を発見・設定して、その解決に取り組むスキルを修得できるカリキュラムを編成している。

(芸術文化の発展と地域・社会に貢献するため、各領域の専門教育を充実させ、広く学問を学ぶことができる領域横断的カリキュラムを編成している。)

DP：現代のリベラルアーツを修得し、芸術と文化を理解する教養あるジェネラリストとして、現代社会でひろく活躍できる知見と技術、思考力を備え、卒業論文審査に合格した学生に対して卒業を認定する。

(専門的実践を通じて社会に寄与する能力と知識を備え、所定の単位を取得した者に学士(芸術)の学位を授与する。)